

日本とタイにおける同性間の親密な関係の国際比較

— 同性愛とトランスジェンダーを中心に —

Intimate Relationships between Same Gender in Thailand and Japan:

Focusing on Homosexuality and Transgender

赤枝香奈子（京都大学大学院文学研究科 GCOE 助教）

【ねらいと目的】

現在、欧米の一部の国や地域では、同性婚や同性間のパートナーシップ制度が認められつつある。このことは、男女のカップル（夫婦）と実子からなる家族を標準と考える近代家族の時代から、多様な家族のあり方を認める時代への変化の表れとみなされうる。これら親密圏における変化はまた、法制度の変更はもちろん、生殖医療や性別適合手術などにかんする医療の進化や学校制度の変化とも深くかかわっている。また、その国や地域の文化的・歴史的背景によっても、その変化の度合は大きく左右される。

同性間の親密な関係というと、アメリカや西欧での動向が中心的に取り上げられ、19世紀後半以降に起こった同性愛の病理化・犯罪化と、その後の同性愛者に対する差別・迫害、権利回復の歴史に焦点が当てられがちである。このような、近代社会に見られた同性愛に対する病理化や差別化の動きは実のところ、何を理想的な親密な関係（「正しい」家族）とみなすかという問題と表裏一体である。そして、そのような規範的家族像は、近代国家の形成と不可分である。このような親密圏の変容を歴史社会的・比較社会的観点から明らかにするため、本研究では、日本とタイという近代家族の時代を経験した／経験しつつある国々を対象とし、近代化と親密な関係の変容を文献、およびフィールドワークをもとに調査をおこなう。その際、とくにゲイ・レズビアン、トランスジェンダーの人々に着目しながら、同性間の親密な関係に対する認識のあり方について、アメリカや西欧社会との比較をおこなう。

【活動の記録】

2008年12月22日～30日

調査地：タイ（バンコク）

調査目的：タイの同性間の親密な関係にかんする文献資料収集

2009年2月27日

調査地：日本（大阪）

調査目的：タイの同性間の親密な関係にかんするインタビュー調査

3月3日～15日

調査地：タイ（バンコク）

調査目的：タイの同性間の親密な関係にかんする文献資料収集およびインタビュー調査
その他、適宜、日本において文献資料収集をおこなった。

【成果の概要】

タイにおいても、日本においても、ゲイ・レズビアン・トランスジェンダーの人々はマジョリティとは言えない。まずは、日本とタイにおい文献資料収集をおこない、彼／彼女たちの置かれた現状を把握することにつとめた。さらにタイ（バンコク）にてフィールドワーク（インタビュー調査）をおこなった。その際、とくに近代的ジェンダー・セクシュアリティ規範の形成と密接なかかわりをもつ、女同士の親密な関係に焦点をあてて調査をおこなった。

こんにち、女性同士の親密な関係を指す場合、一般的に「レズビアン」というカテゴリーが使われる。日本でもタイでも、この近代西洋的なカテゴリーは共通して存在するものの、それがどのような人々を指して使われているのか、またどのような人々が自称するのか、また、他のどのようなカテゴリーと区別するために用いられるのかは異なっている。日本の場合、それがヘテロセクシュアルな女性との区別を意図して用いられるのに対し、タイの場合、そのほかに「トム・ディー」という、また別の女性同士の親密な関係（トムは *tomboy*、ディーは *lady* の略）と区別して用いられていることが明らかになった。一般に、トムは「男性になりたい」あるいは「自分を男性だと思っている」女性とみなされ、事実、「男性的な」髪型や服装をしている場合が多い。ディーやレズビアンの女性に比べ、より規範的女性像からの「逸脱」の度合いが大きいといえるが、例えば、日本の FtM (Female to Male) トランスジェンダーの人々と比較した場合、社会的な認知のされ方が大きく異なること、また近年、タイでは、トムに関連する新たな動きがみられることが明らかとなった。

1月の次世代国際ワークショップでは、本研究の中間報告として、近代日本において、女性同士の親密な関係がどのように捉えられており、どのように変化したか、それは近代的ジェンダー・セクシュアリティ規範の形成とどのようなかかわりをもっていたかについて、口頭発表をおこなった。またその発表をもとにした論文を、*Proceedings of the 1st Next-Generation Global Workshop* に発表した。さらに本研究の成果を、4月7日の「研究成果報告会」で報告予定である。